

■ 星を投げる人 ■

社会学者の橋爪大三郎が、昨年、ローレン・アイズリーの『星投げ人』の話を新聞に書いていた。以下はその記事である。

「星を投げる人」の話をしよう。

この話を最初に聞いたのは、アメリカのある教会の説教でのこと。もう何年も前である。牧師はこんなふうに話した。

「朝、いつものように海岸を散歩していると、ひとりの少年が何やら、海に向かって投げている。「何してるんだい?」「ヒトデを投げているのさ」。見ると、見渡す限り無数のヒトデが打ち上げられている。やがて死んでしまうだろう。「こんなにたくさんいるのに、何の足しにもならないよ」。少年は、ヒトデをもうひとつ拾いあげた。「でもこのヒトデには、大きな違いだと思うよ」。そう言って、そのヒトデを海に向かって投げたのである。」

この話は耳に残った。足しにならない、は no difference。違いがある、は make a difference。「違い」とはなんだろう。

調べてみるとこの話は、ローレン・アイズリーという作家の『星を投げる人』が元になっている。それをいろいろな人が語り直し、子ども向けもでき、いくつものヴァージョンがある。でも話の急所は、少年が言う「違い」とは何かということだ。

ヒトデはこんなにたくさんで、全部は助けられない。徒労に思える。でも少年は言う、「この」ヒトデは確実に助かるよ。そして、ひとつずつヒトデを投げ続ける。それならできるから。「ハクソー・リッジ」で負傷兵を助け続けたデズモンドのように。そして、ささやかな「違い」のために、悪戦苦闘している誰でものように。

「違いがわかる」コーヒーのコマーシャルがあった。「違い」は、消費社会の高級品を味わう能力のことではない。自分の生きる意味を理解できる知恵のことだ。

(2017年7月11日付 日本経済新聞夕刊「あすへの話題」より)

この文章は、私の心を静かに打った。そして最後の一文を何度も読んだ。

人間は時に、自分のしている行為に虚しさを感じることがある。懸命に努力しても結果がついてこないと、何の足しにもなっていないのではないかと、という思いにも駆られる。

しかしである。本当に「何の足しにもならない」のか、それとも「大きな違いがある」のか。それは、行為をどう見るかによる。そして、悪戦苦闘している多くの誰でもをこう励ます。“no difference”ではなく、“make a difference”と捉えられる能力は、生きる意味を見いだすことができる知恵であると。

橋爪の言葉に勇気もらう。生徒たちにはこれからの長い人生を、「星を投げる人」として歩んでいってほしい。私もそうさせてもらおう。心豊かな人生を送るために。